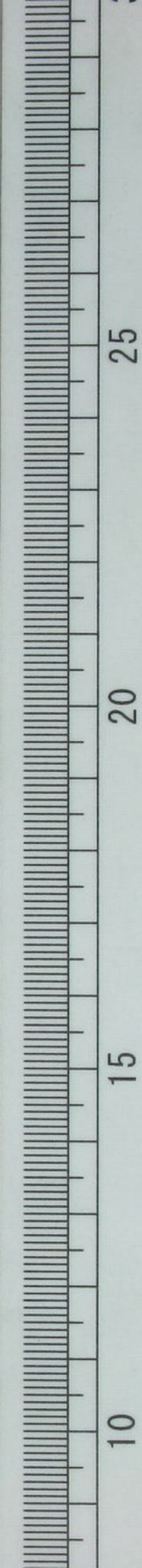


沼尻絰一郎編輯
西南太平記

三號
上



10

15

20

25

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平記

東京

萬笈閣發兌

48-786

勅使柳原公と以て島津氏へ賜りたる勅書の寫
 鹿兒嶋縣下逆徒熊本亂入朝憲と茂如一官兵不
 抗一悖亂舉動に及ぶ朕已不征討の令と布き二品
 親王有栖川熾仁と以征討總督と為一進發と命ぜ
 り汝久光實不國の元功朕り素より信重まる所令
 特不議官柳原前光と遣一朕が旨と諭さむ其能
 く爾の誠意と致せ

十年三月十二日

西南太平記

三編上二

西南太平已

三編上

嶋津父子の
館小勅意と
申渡す



西南太平已

外史臣





西宮平八

三編上



西宮平八言

島津悦三郎



西南太平記三編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第五回

逆將篠原國幹討死
并野津大佐聯隊旗取戻す

天下を動亂あきんと企て一乱賊あり何ぞや
事件を起し西郷以下の輩叛賊の名を得て砲
煙と共に空一く消るよあらずや刀下一垂の
露とあつと敢なく亡びん爰を眼前あきど

一時逆威を逞ふべく其の勢ひも乗ずるも
 突然として兵を起し三月二日午前十時より
 植木小倉より午後三時まが大激戦あり大小砲
 と連發したりしが賊軍を死と決し戦ひしが
 暴徒ハ彌々官軍の為め敗走とあり一ト先
 退いく翌三日午前七時より山鹿口より官軍と
 激戦し雙方進んで午後三時まがの炮戦ハ
 賊と打破り益々勝利と得又高瀬口も官軍よ

り進撃したる小賊軍支へし事ありは因りて
 官軍直ちよ木の葉に進み同所を焼き去りし
 進撃して田原坂ハある賊の營所を破りて彌々
 進撃するその勢ハ破竹の如くあしく黒烟天
 漲ぎり砲聲地を裂くかと疑ふといはりたる
 午後一時ハ休戦し同二時より復し開戦し賊軍ハ
 植木より進撃し官軍を挟み撃つたり
 けを茲よハいて官軍利を失ひたりしが官軍

を賊の臺場と乗つ取り大砲二門と分捕りせり
茲も亦熊本城を谷少将が充分に籠城の手配
りありと累日賊をやぶつたるが昨今ハ賊軍ハ
死を決し鼓躁しく進み兩軍の砲響ハ
天地ふ轟き賊軍尤も剽悍めて官軍一時苦
戦ありしかど程多く賊軍を弾薬尽きその
勢ひ抗す可からざり遂に引退きたり其の
時双方の死傷多かりしと熊本城の傍らなる

祇園山に賊軍據りて屢々大砲を打下し長崎
口柳川口の三方より賊軍烈しく攻寄るが故に
官軍頗ぶる困難しく苦戦ふなりと数度
りとまゝと参謀三好少将の手紙を負はれど
由日々戦地不臨まじ山縣参軍も戦地と巡回せ
らる蓋し三好野津の兩将大兵と率お数道並
び進んで賊軍とその銚と交し或は進み或は
退く官軍精練勇猛めて堂々正々の勢ひを

とつて賊軍を敗るる如く然れども賊軍も又
 猛勇慄悍ありてその進路と妨げ
 殆んと官軍と苦むるごとく砲聲山岳の
 崩るが如く黒烟原野と蔽ひ彈丸あめの如く
 流血杵と漂はす假令官軍利あるも將校以下の
 死傷あり賊軍の大將篠原國幹は去る二十八日
 の戦争ふ手疲を受けて引揚げたり一が三日の
 激戦ふ再び進撃し大に戦ひ官軍の横備へを

打ちたるふ因り官軍之と奮戦し新手あつて進
 撃せらる賊將篠原ハ命を傳ひて劇戦し遂に
 篠原の隊ハ敗走とあり死と決して短兵急不斬り
 入り自ら篠原國幹參謀と討とらんと進撃し
 て遂に深手と負ひ同日午後五時ごろ討死せり
 賊軍益破れ死傷尤も多かり官軍ハ一先
 引退き双方共不怪我多く官軍を連戦打勝ち
 田原坂と抜き植木と乗り取り今一手ハ吉次山

石南大平記

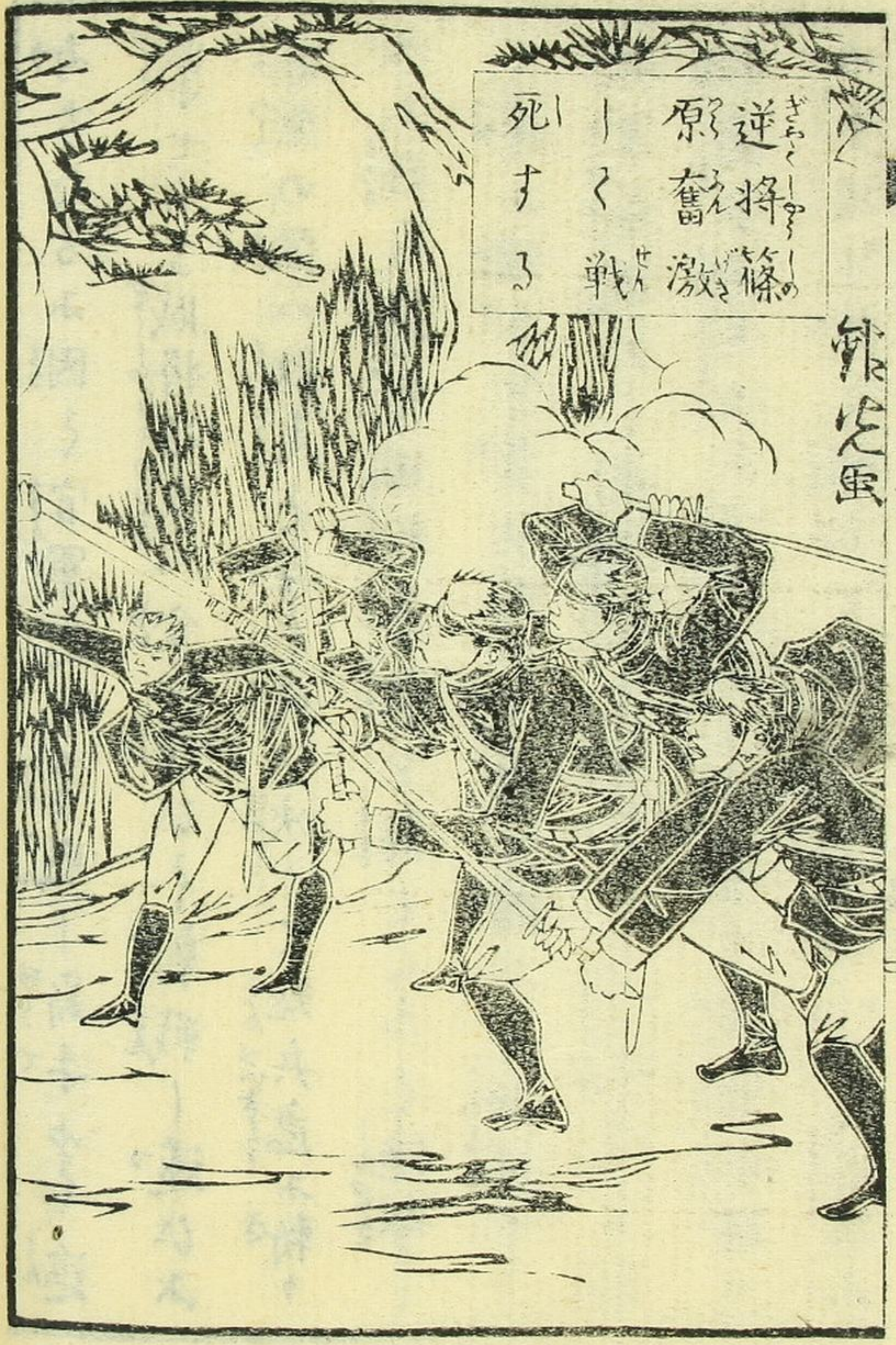


三編上

逆將 原 奮 激 條
死 一 原 奮 激 條
才 一 原 奮 激 條
了 一 原 奮 激 條

石南大平記

石南大平記



とも取りて大久保に向ひ既す熊本くまもとも達たつす山鹿口やましかぐちの戦いくさひの互たがひに劇戦げきせんたりしが参謀さんぼう福原大佐ふくはらだいさの篠原國幹しのはらくにのぶの討死うちじとつらより追討おひつけるさんと音次ねじ越こえへ進撃しんげきせしと

傳でんふ曰いひく篠原國幹しのはらくにのぶの鹿兒島かごしまの士族しぞくありて温良おんりやう篤實とくじつあり沈深ちんしん勇ゆうあり多おほく事ことと誤あやまらば軍畧ぐんりやく兵學へいがくも達たつすとて我わが長州ちやうしゅうの勇士ゆうしも比ひそれそれを高杉晋作たかすぎしんさくの地位ちゐも増まりて西郷さいきやう

も常つとふ大事だいじの機密きみつを談だんずるも必かならず篠原しのはら一人ひとりと共ともみす桐野村田きりのむらたの徒とを已決おひけつの後のちもあらざとを之こも我わが知る能あたはず西郷足他家さいきやうあしけも踏ふまず門かどを出いれば必かならず篠原しのはらの家いへもつらこの我わがの任用にんようせらるる此この如ごとく抑おさも篠原しのはらを堂どう々せき正せい々の兵へいと御ごするふりつとも慣熟なれたり敵てきの正面しやめんも向むかつと之これを破やぶるも尤なほも妙めうを得えたり往年こふねん伏水ふくみづの役えきも於おて幕府まくふの兵へいと大坂おおさか

まゝ逐ひ返したる薩兵の隊長をよの篠原
 なり戊辰の際上野戦争は黒門の表は向つ
 て彰義隊と戦ふときも篠原こそは進発は
 前なく敵未解散せざるは篠原先導しとく
 門に入る兵士の其死せんと恐れ擁して之を
 門外へ曳出さする事七度その勇此の如き
 とめつと兵士皆奮つて之が為り死せん
 と願わざるなりりと西郷之に聞き其の

必ず死せんと恐れこそ針路を轉ぜりあ
 と使と遣を之と告ぐ篠原憤然として云
 ふ西郷氏何故ふ斯く言ふ蓋し我を以
 て此口ふ當るふ足らずとせらるが我へ我が攻
 口と守る此處最大の難所我の當るところ
 ありと西郷之を聞きその遂ふ死あんと残
 憂へ弟従道として之を言ひあて曰く此所の
 外は猶一の難所あり遙くは之より勝れり

足下之^{これ}當^{あつて}る意^い多^{おほ}きう篠原乃^のち曰^いく猶^{なほ}一層^{いっしやう}の難^{なん}所^{しよ}ありと聞^きく赴^{おもむ}くを我^{われ}郵^{ゆう}怯^{けつ}ありと乃^{すなは}ち兵^{へい}と拳^あげて退^{ちぢ}りて其^{その}剛^{かう}氣^き此^{こゝ}の如^{ごと}く戊^ぶ辰^{しん}の役^{えき}あふ處^{ところ}々^{ごと}く功^{こう}あり因^よつて後^{のち}陸^{りく}軍^{ぐん}少^{せう}将^{しやう}ふ拜^{たま}命^{めい}し近^{ちか}衛^ゑ兵^{へい}の長^{ちやう}官^{くわん}とるまじりその他^{その他}明^{めい}治^ち五^ご年^{ねん}西^{せい}郷^{きやう}等^{らう}官^{くわん}と退^{ちぢ}りて迨^{たいて}びと桐^{きり}野^の等^らも亦^{また}去^さる種^{たね}田^の少^{せう}将^{しやう}定^{じやう}とうれひ相^あ言^いつて曰^いく陸^{りく}軍^{ぐん}士^し官^{くわん}斯^かく去^さるみ於^おて

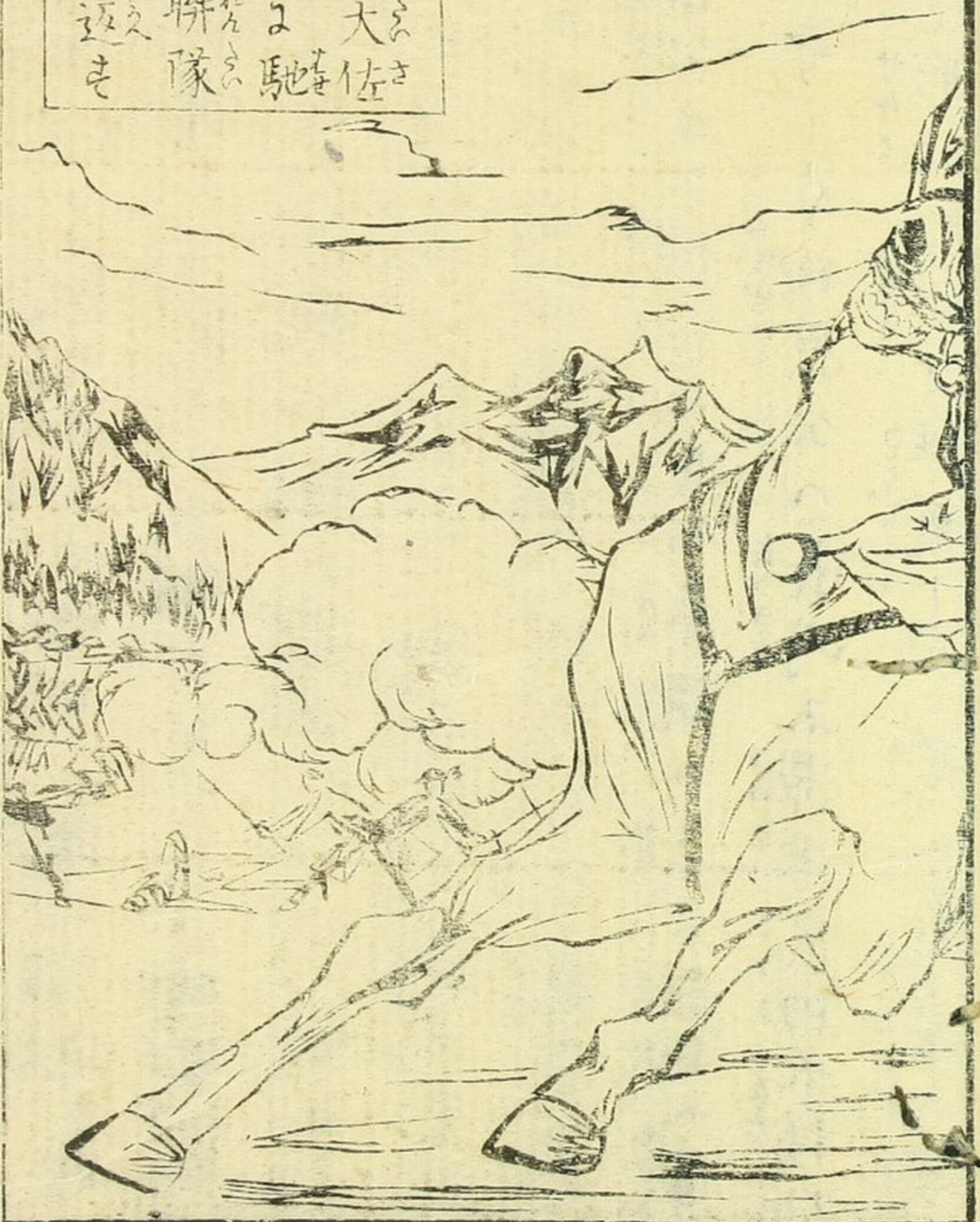
てハ亦^{また}慮^りる多^{おほ}き能^たはず然^{しか}れども篠^{しの}原^のあり猶^{なほ}憂^{うれ}ふるみ足^たらざと談^{だん}論^{ろん}未^まと止^とざるみ篠^{しの}原^の亦^{また}と去^さる因^よて一時^{いちじ}ハ近^{ちか}衛^ゑ兵^{へい}の沸^あ騰^とありりしと云^いふ篠^{しの}原^の常^{じやう}み西^{せい}郷^{きやう}に依^い頼^{らん}するよ西^{せい}郷^{きやう}ハ一^{いつ}生^{せい}と誤^{あや}らざる従^{じゆ}来^{らい}の拳^{きん}動^{どう}あり明^{あき}らりりと信^{しん}じて疑^うはず時^{とき}々^{ごと}相^あ謀^{ぼう}りてその可^う否^ひと決^{けつ}まるの風^{ふう}あるよより今^{いま}回^{かい}の事^{こと}も蓋^けし西^{せい}郷^{きやう}誤^{あや}られしものみんり何^{なん}よりて篠^{しの}原^の

異人別名の所為の如く吾輩篠原の略史
と聞きあるまゝあり

備も福原大佐の必死の激戦に殆んど苦む
る官軍の大兵の將校以下の死傷あり賊軍益
進撃す福原大佐の賊と追ひ退げんとせしふ
賊勢ひ盛みく遂に福原大佐の手疵と負ひ
るぐる屈せずして戦ひつりぐ深手と負ひ一先
引揚げ翌四日の開戦彌吉次越え烈しく戦ひ大

小砲と連發し突然と一々の手の伏勢起りて
官軍と大激戦す他の官軍の高瀬より二手に
分れ一手は河通りより進撃し大に賊軍と打敗り
勝を乘りて高橋に至る時少佐聯隊の旗と賊
軍の為小奪をとりたりぐ野津大佐遙に此體と
見て駿馬の鞭と加へ渦巻き来る敵中へ馳せ入り
遮ぎる敵と馬蹄を蹴散らし見りく十四五人
真先に進を来ると午早く四五人斬り落し難無

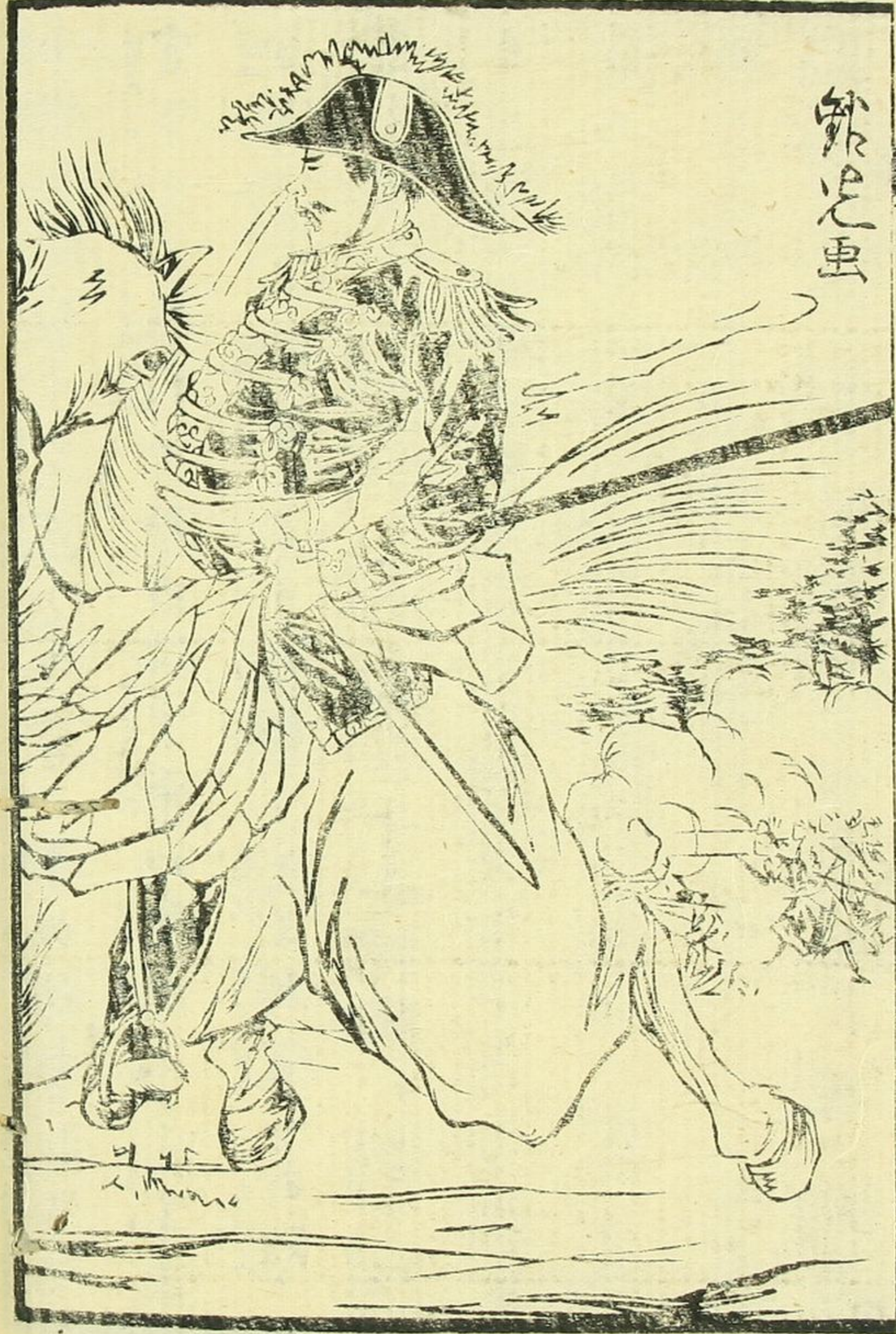
の野津大佐
 賊軍は馳
 入り聯隊
 旗と取返さ



西の南の

三宮上

第之里



西の南の

三宮上

旗と取り返す一徐々として味方の陣へ引返され
 一有様の實目覚まりさ働さあり一と賊軍一同
 追蒐行ふんと進撃一既又暮間まゝ近へ戦ひ
 一双方とも引揚げたり一が最早敵中寂々とし
 て去るあり又鹿兒島表へ勅使として遣はさる
 一柳原公及び隨行の黒田参議の未だ該地へ着
 せられざりしと柳原公の長崎に滞港黒田参議の
 博多と戦地の間と往復し居られ海軍の軍

艦を長崎より肥後海へ龍驤春日清輝下加鳳
 翔の五艦と配置一福岡より下の関の方の日進
 筑波浅間孟春高雄テールボルとも都合六艦と
 配置一東艦の當今神戸港にあり斯て島津父
 子の鹿兒島にあり這回の暴動の最初より
 關係なく西郷の舊知事へ面會を乞ひたれとが
 謝絶して遇ざりしゆふ西郷の縣下の夏と大山
 網良に頼りて肥後路へ出陣せり島津父子の政

府の意とも奉載せむ特別の意見と主張して確乎
 として動うずと是の暴徒が其禍ひの島津父子に
 及ぶさんと強恐れ強て其黨ふ引込まざりしが鹿
 兒島の島津家代々の舊領地あるもバ暴徒も旧城
 下ふ沸騰るゝても暫時肥後路へ操出ゝ島津父
 子の舊地へ残りゝ士族等も屢説諭ゝ福岡老公
 と共ふ盡力なせゝ茲も福岡老公の媒妁ありと
 舊宇和島伊達家の御息女富姫として

ふるれけり今度島津家の公子悦三郎殿と
 云ふ二十歳より此悦三郎殿へ嫁して婚姻の約と
 結ぶも既小東京を發して神戸まで着れたる由名
 同所への島津家令が出迎ひとして来り居られ
 たりしが頓と蒸氣三國丸へ乗込まんとする處
 と西京より三國丸と俄軍用とありつゝ出帆もる
 りか殊不行れる先の鹿兒島の最早戦地と
 ありて姑く見合とるる故も其儘神戸も滞留最

石南大平記

三編上

徒然不^レ見^レえ給ふと慰^レめか初^レく鹿^レ兒^レ島^レの景^レ況^レを
 斯^レ様々^レ騷^レ擾^レきも名^レ御^レ輿^レ入^レれもあ^レるま^レど^レ思^レひ
 るま^レを^レ一^レ先^レ里^レへ御^レ帰^レ邸^レあ^レるや取^レり計^レひ申^レさん
 うと傳^レ役^レが言^レけま^レば姫^レの聞^レあ^レず一^レ旦^レ父^レ母^レの家^レ
 と出^レて今^レの夫^レと嫁^レづく身^レあ^レまを縦^レ令^レ行^レ方^レの荒^レ
 波^レの縁^レ邊^レ一^レ船^レのあ^レるざ^レるとも阿^レ容^レく里^レへ帰^レらる
 べきうよりや東^レへ戻^レるとも吾^レ儕^レが家^レの伊^レ達^レあ^レらる
 ず早^レや島^レ津^レ家^レでありつまを被^レの邸^レへこそ

あまは又^レ今^レ更^レ否^レの言^レふま^レ死^レ生^レと夫^レと但^レする
 とが女子^レの道^レと聞^レくか^レと吾^レ儕^レの操^レと失^レのぬや
 う兔^レも角^レも計^レらひよと涙^レるが^レみ宜^レにする
 不^レ傳^レ役^レの更^レは言^レ句^レも出^レり^レが取^レ計^レひ兼^レ一^レ有^レ様
 に姫^レの稍^レあ^レる^レ吾^レ儕^レが夫^レ島^レ津^レ悦^レ三^レ郎^レ殿^レ一^レ首^レ
 と認め^レ贈^レらんと暫^レ時^レ此^レ港^レに滞^レ留^レ中^レの奇^レふその
 景^レ況^レとよめる左^レの如^レし
 「心^レの思^レひあ^レがせ^レ海^レ士^レあ^レるあ^レき煙^レりの立^レ波^レるう形^レ」

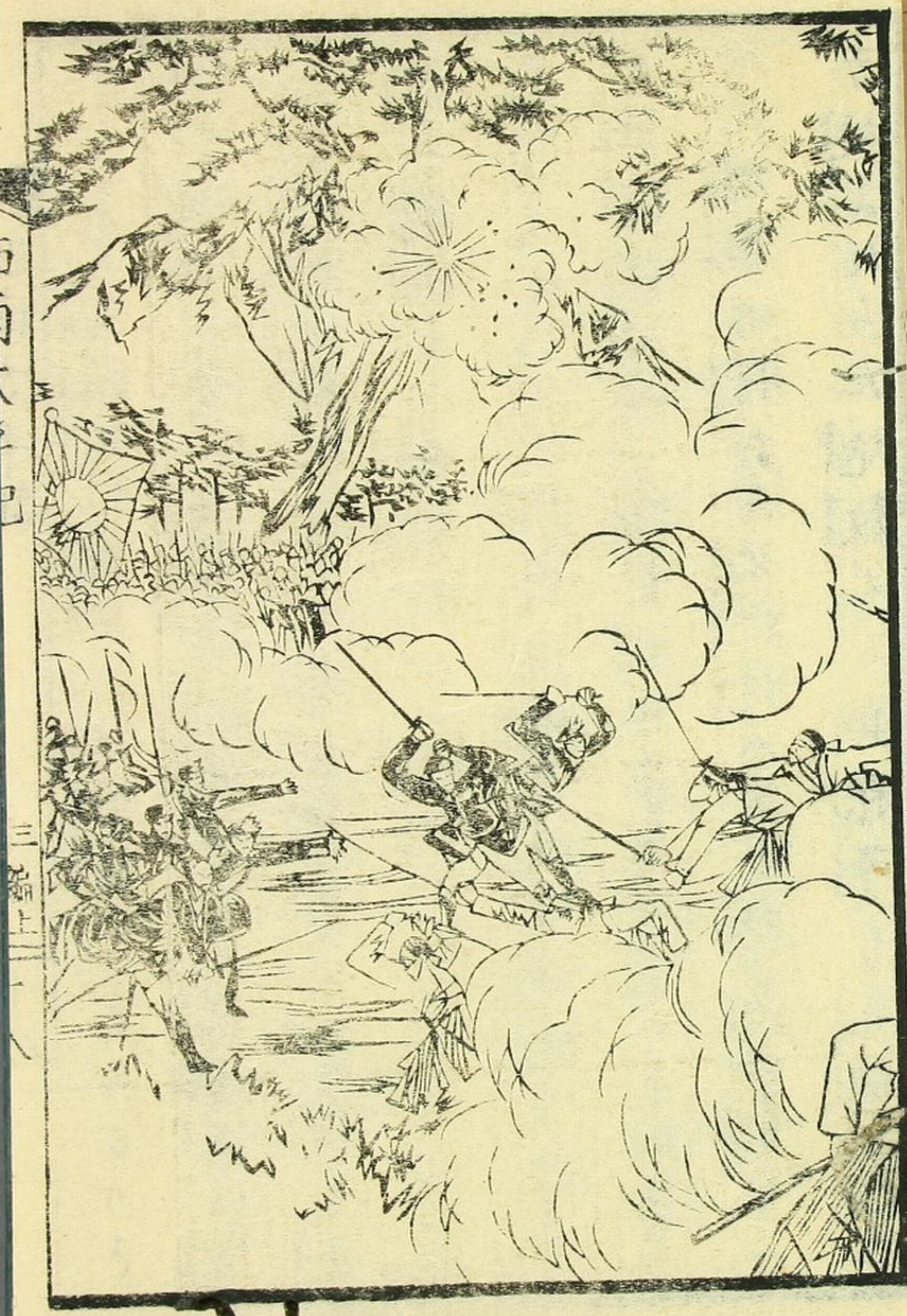
西南太平記

三編上二一六

鹿兒島の暴士族が肥後へ残らず出兵とあり追々
 穂と聞より姫の宣ひけるよその昔日本武尊上総
 富津へ武蔵より渡らんとせよ風波悪しく橋姫
 へ龍神へ祈願し其身の海底に入て藻屑とあり
 一が吾侪も西海に望み鹿兒島へ渡るよ何んぞ
 風波と厭ふべしと長刀と杖よつきとく神辺海岸
 と巡回せしとよ此富姫の名代の美婦ありまよ
 彼の島津家の公子悦三郎殿も頗る美思ひあり

寫真と取り換さしとく縁組の整ひ成りし

編者云く島津悦三郎どのの鎌倉管領のころ
 常陸のふの住人小栗小太郎判官代助重ふ
 して亦富姫の佐竹氏の照姫とらんや御夫
 婦揃て英傑たり並人の知る所あり
 富姫悦三郎殿の約と結をれしは實よ西の海面
 小波立て渡りよ姫の絶たるより斯く心をも惱は
 するは奈何ふも痛しく頓く航海を開きしと



三好野津
兩將大率
田原坂
進敷手

西南太平記

十七

言ふるなり又該地の諸々陣營様のところありと
種々標札と掲げ海軍造船所にて元海軍の官
員有馬氏が長とありて晝夜弾薬と製造し又
兼て賊徒より亜米利加へ注文してあり一ノナ
イドルライフル銃壹万挺と此頃廻船あり
が弾薬銃丸の一發も来らざるを大に力と落
たり賊軍の持たる元銃へ三千挺其他合て一
万挺とたらん炮数あり兵糧等も充分ありね

と所謂背水決死の軍故一時に熾るるが斯く賊軍
へ日夜熊本城に迫り四方より大砲小銃と連発し
其の砲声萬雷の如く山岳為し震ふ至る城中に
は更ともせずして之は應撃し少しも動く色あり
と云ふ

抑熊本の城下の人口十萬餘ありて長さ二里
餘横一里半ありて大都會ありて鹿子木を
人戸百餘軒ありとところありて熊本城下あり

一里餘あり植木ハ熊本より二里餘人戸三四百
軒もある可あり宿驛ふて此所の菊地山
鹿高瀬杯より攻来る敵を防ぐ一要地也
昔時加藤清正も陣山と名付け廣野を切下
しゆのし見ゆ左右とも二間程の切岸の地あり
左右に少々の櫻樹を植付置きたり田原坂を
植木と木の葉の間より坂ふて随分要害の
地あり茶屋五六軒あり熊本より五里後木

葉嶽の岩險あり前より川と帶高瀬へ人戸千
三百餘熊本より六里半元細川若狭守の城下
あり有名の一市街あり

賊軍ハ一銃殆ど千發とす至れば銃ハ熱して之を
握る能く又山鹿高瀬兩所よりある賊軍ハ最も精
銳あり以て高橋河内等の要衝の地あり夫々兵
と分ちて力守一西郷大將ハ尚川尻に依然たり

一説云當時此所より出兵すべし熊本城を窺ふ為

あくんと熊本より七里離れ温泉河じが西郷之み入る
 自若と其若と圍士卒の進退と温泉の報知させ砲声
 と聞て今と下すと川尻より熊本城へ二里半熊本
 南の関へ八里まで南の関の入口五百軒ありて頗る良駅
 高橋の入口二百八十軒ありて熊本より二里肥後の國第
 一の大港の川尻の町の入口四百餘此地より熊本迄の大道よ
 て一の險地より平地にして大軍と容るに差支るはとるべし

西南太平記三編卷之上終

010190507608

